

日本華僑による文化提示と エスニック・アイデンティティの主張 神戸華僑歴史博物館の考察を中心に

張 玉 玲*

The Display of Ethnic Identity through a Cultural Presentation: The Case of Kobe Overseas Chinese History Museum

ZHANG Yuling

Abstract

Focusing on the history and culture of Chinese in Kobe displayed in Kobe Overseas Chinese History Museum, this paper will discuss how the Chinese in Japan show their ethnic identity through the interpretation of their history and culture.

Kobe Overseas Chinese History Museum was established in 1979 and reopened in 2003 with the cooperation of several scholars of overseas Chinese studies. On the subject of *luo di sheng gen* (落地生根), which means “Overseas Chinese have put down roots in Kobe”, the history of Kobe Chinese is divided into six stages and the exhibitions are carefully selected to characterize each stage. The display emphasizes the interaction between Chinese and Japanese and the Chinese` contribution to the community through historical events including Hanshin Earthquake. On the other hand, the differences and conflicts inside the Chinese community are carefully avoided. The display also expresses the ideas of Chinese in Kobe about the Sino-Japanese War and presents a vision of cooperation and harmony between Japanese and foreigners.

Thus, by asserting that they have put down roots in Japan and contributed to the community, the Overseas Chinese in Japan are calling for an equal position in Japan as Japanese citizens as well as Chinese persons maintaining Chinese culture.

はじめに

1980年代以降、日本の華僑¹は世代交替が進み、中国人意識が希薄化した三世、四世が中心となりつつあり、その存続が懸念されている。一方、中国の経済成長や日中関係の改善などに伴う、日本人の中国文化への関心の高まりの中、華僑は自分の文化を

見直し、その価値を再発見しようとし始めた。彼らは、自らの判断で中国文化の中の要素を取捨し、あるいは新たに創造し、活発な文化活動を展開している。本稿では、華僑のこうした文化活動のひとつ、神戸華僑歴史博物館における華僑歴史・文化の展示に注目し、エスニック集団である華僑が日本社会の一構成員として、如何に自らの

* 名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻 博士課程後期課程

エスニック・アイデンティティを解釈し、その存在を示そうとしているのかについて検討してみたい。

これまで、日本華僑についての研究は、主に経済・歴史の視点から行われてきたが、1980年代から、エスニック研究の領域でのアプローチが見られるようになった。戴は、華人が自己変革に努め、居住国社会で自立と共生を求めていくための精神的支柱は中華人性（Chinese-ness）にあるとし、彼らにとって「華人としてのニューアイデンティティの確立は、緊急にして必要不可欠の課題」（戴1980）だと述べ、中国との関係ばかりに注目せず、エスニック研究の視点を持つ華僑研究の必要性を訴えた。それを受け、過（過1999）は、三世代にわたる華僑の婚姻意識や婚姻形態、儀礼などを調査・分析した上で、華僑のアイデンティティは、世代別の特徴が見られ、多元的なものへと変化したと主張した。

日本華僑の文化活動を文化創造の観点から考察したものには、王（2001）や張（2004）などがある。王は、長崎、神戸、横浜三地域の華僑による芸能・祭祀を、伝承者が日本人か華僑か、一世華僑から受け継いだか、新たに作り出したかなどによって、「受容芸能・祭祀」「伝統芸能・祭祀」、「新伝統芸能・祭祀」などに分類し、各地域における華僑エスニシティの再編の現状を描こうとした。また、張は、横浜関帝廟の再建や関帝誕の創出過程に注目し、文化的シンボルの選出・淘汰のプロセスの分析を通して、華僑自らエスニック境界を定位していくメカニズムをミクロな視点で明らかにしようとした。これらの研究は、華僑の価値観や文化変容の考察を通して、華僑の故

郷である中国ではなく、日本の地域社会との相互作用の中で、エスニック集団としての性格を一層鮮明に形成していったことを明らかにした。

しかし、いわゆる日本社会の一構成員として、華僑が如何に自分の存在を示し、自らそのエスニック・アイデンティティを解釈し、そして表現しようとしているのかなどの問題についての分析はいまだに乏しいと思われる。「動的」で、「一時的」な演出である芸能・祭祀とは異なり、華僑歴史博物館は、「静的」な、「常設展示」を通して、特定なメッセージを「意図的に」観客に伝える文化的シンボルとして、華僑による能動的なエスニック・アイデンティティの主張を典型的に表す場所である。また、「歴史博物館」で語られている歴史は、博物館の主体によって部分的に強調され、あるいはコントロールされることが一般的であるだけに、神戸華僑歴史博物館は華僑たちの価値観やイデオロギーなどの表れそのものであり、その展示内容と展示方法の考察は、華僑のエスニック・アイデンティティの主張を明確にする有効な手段と考えられる²。

1979年に設立された神戸華僑歴史博物館は、日本における唯一の華僑自身による歴史博物館であり、世界でも有数の存在と言われる。神戸の華僑社会が相変わらず戦前日本に定住した老華僑主導型となっており、中でも三代、四代ないし五代目がその中心となっている現在、神戸華僑は華僑歴史博物館を通して、誰にどのようなメッセージを伝えようとしているのだろうか。また、2003年に再開した博物館の、展示内容と展示方法の変化はいかなる意味を持つのだろうか。本稿では、神戸華僑歴史博物館の設

立や歴史を整理した上で、再開後の展示内容と特徴を分析し、神戸華僑のエスニック・アイデンティティの主張の内容を検討してみたいと思う。

まず、神戸華僑歴史博物館の設立と歴史を概観し、初代館長陳徳仁時代の展示内容を確認する。そして、2002年から2003年にかけて改装され、一新された博物館の展示内容と展示方法の特徴を分析する。次に、華僑の神戸華僑歴史博物館における主張の内容を、更に個々の神戸華僑のアイデンティティへの分析を通して検討する。最後に、華僑が自らの文化に価値を見出し、それを能動的に解釈することによって、長い歴史の中で日本社会に根ざしてきたことと、日本社会に貢献してきたことを主張し、中国人の民族意識を保ちながらの多文化共生の可能性と必要性を唱えている神戸華僑のエスニシティを考察したい。

神戸華僑歴史博物館の設立と変遷

1. 神戸華僑の歴史と変容

1868年に神戸が開港されると、1859年安政開国によって一足早く開港した長崎、横浜から10数人の華僑が移住してきた。主に福建、広東、浙江、江蘇出身のこれらの中国商人が神戸華僑の始まりとされた。1871年日清修好条約の締結まで、中国人は無条約国の国民という身分であり、外国人居留地の西側（現在の元町と栄町）に日本人と雑居していた。それが現在の南京町の雛形となった³。

歴史上、神戸華僑は日本に拠点を置きながら様々な領域において中国と緊密なつながりを保ってきた。特に第二次世界大戦勃発前、神戸港貿易における神戸華僑の役割

は大きく、マッチ、寒天、硫黄などを中国や東南アジアへと輸出し、米、大豆などを日本に輸入していた。日露戦争前後のこの時期、浙江系で怡生号の呉錦堂、福建系では復興号の王敬祥、広東系で怡和号の麦少彭などの有力な貿易商を輩出した。また、神戸華僑は1898年戊戌变法以来、梁啓超らの变法派、立憲派とつながりを持っており、1911年辛亥革命が勃発した後、中華民国僑商統一連合会を結成したり、革命政府に義捐金を送り、義勇隊を派遣したりした。後に国民党交通部、中華革命党支部を結成するなど孫文らとの提携を強めた。1928年国民党の統一後は、領事館と国民党神戸支部の二つの系統、神阪中華会館⁴と神戸中華総商会⁵などを通じて中国と深い関係を築いた。しかし、日中戦争は神戸華僑の貿易における役割を低下させ、また、戦時下の日本政府の華僑に対する弾圧と懐柔により、華僑の抗日運動は困難に直面した。

戦後、在日華僑の職業も事務関係者、サービス業、販売業などと徐々に多様化していき、彼らの帰属意識が大きく変わった。日本華僑は「日本定住という自らの選択に基づき、彼らの社会関係の重心を、明らかに華僑と母国（または故郷）や、母国の家族、親族との関係から、華僑と居住国日本及び日本人との関係に転換してきた」（過1999：208）。神戸華僑も、日本の会社への就職、国際結婚の増加、日本国籍取得の簡易化など華僑社会に頼らなくても日本社会で容易に生きていけるようになる中で、自身のルーツ、或いは祖先華僑と関連する事物への関心は薄くなっていった。特に、外国人の帰化が難しく、客観情勢により多くの人たちが中国国籍を保持していた1960年

代以前と違って⁶、70年代以降は国際政治問題も関係して日本国籍を取得する「華人」が増加、中国国籍を保持する「華僑」は減少する一方だったため、会員資格を中国国籍保持者の華僑に限定していた華僑総会などは後継者不足や資金難など様々な問題に直面するようになった。先祖華僑から受け継いできた歴史的資料や文物などの保管も困難となってきており、早急な対策を講じることが課題となった。

2. 神戸華僑歴史博物館創設と歴史の変遷

神戸華僑歴史博物館の創設者兼初代館長は故陳徳仁氏（1917 - 1998年）である。陳氏は、広東出身華僑の父と日本人の母を持つ華僑二世で、神戸で活躍した華僑貿易商だった。孫文・華僑研究者、華僑教育者としても有名であり、在日外国人に与える最高の勲位である勲五等瑞宝賞を日本政府から授与された（1984年）。1979年博物館設立当時、陳氏は神戸中華総商会の会長だった。第二次世界大戦で華僑に関係するあらゆる資料が焼失し、華僑のルーツを辿ることが

出来なくなると心配した陳氏は、1950、60年代から「華僑百年史」を編纂しようと資料収集をはじめた。当初、特に一世華僑の勤勉の伝統を若い世代の華僑に継承させることを目的に、香港など様々な所から集めた資料をショーウィンドウに展示し始めたが、後、日本人の観覧も視野に入れて、書類と写真だけでなく、華僑が使用した器物や中日友好に関係する文物などを揃え、歴史博物館とした。さらに、世界中の華僑に関係する資料も集められ、神戸華僑歴史博物館に展示されるようになった。1979年10月、神戸中華総商会（KCC）ビルの落成とともに、神戸華僑歴史博物館はその二階に正式に開館された。博物館を創設した目的について、館長の陳氏は以下のように語った。

「この博物館を創設するのは、前代華僑の奮闘した歴史を保存し、中華民族の悠久の文化を伝播することと、我々の後世代が過去を忘れないように、在日華僑が作り上げた業績を宣伝するためである。一生をかけてこれらの歴史文物を収集・整理するのは、



2002年以前の華僑歴史博物館 写真提供：神戸華僑歴史博物館

神戸ないし日本の華僑がいかに険難な創業史を書いてきたかを世間に知ってもらい、同時に日中友好を促進するために微力を尽くすためである」(徐大衛・馮雅萍2000: 58)。

上述の目的に従い、博物館では主に、神戸開港以来、華僑業績の歴史的記録や写真、孫文が神戸での革命活動を展開した時の親筆書類、図表およびその他の資料、

日本各地の華僑による著作や器物、文献資料、廖承志(中華人民共和国成立後海外華僑関係の指導者として活躍)その他の都市の政府関係者が書き残した書、などが展示されていた。300平米の展示室には、華僑歴史に関する一次資料1000余点、華僑関連の書籍や雑誌など一万冊が収められていた。

神戸華僑の中での人望もあって、陳徳仁氏が収集した文物や資料の半数以上は、華僑個人から寄贈されたものである⁷。陳徳仁氏のつながりで神戸を訪れた中国政府の関係者が華僑歴史博物館に案内されたり、レポート作成のために資料を調べにくる大学生が多くいた⁸。当初は博物館というより、資料館の性格が強かった。1980年、兵庫県より「ひょうご文化100選」に選定され、また1984年孫中山記念館⁹が建設されたとき、華僑歴史博物館は一部の資料を提供した。

華僑歴史博物館は、神戸中華総商会の管理下にある。KCCビルを管理・運営するためのNPO組織が設立され、毎年、文化活動やスポーツの試合、親睦旅行および華僑経済研究シンポジウムが行われていた。しかし、1995年阪神大震災で館内のケースが損傷し、また、1998年創設者である陳徳仁氏がなくなると、博物館は一時期混乱状態に

陥った。2000年4月林天民氏が館長(蔡篤欽氏はその時から副館長)になるまで蔡篤欽氏が館長代行に就いていた。しかし、2002年1月、蔡篤欽氏の急逝とともに、林天民氏も館長を辞した。同時に華僑歴史博物館の存続問題が浮上した。

3. 神戸華僑歴史博物館の再開

館長不在の状況が続く中、孫中山記念館の副館長を務めている王柏林氏は、華僑歴史博物館長の兼任を受諾した。2002年7月、神戸中華総商会は博物館の存続を決定し、王柏林氏が館長として正式に就任した。

以来、神戸大学の安井三吉氏や神戸商科大学(平成16年4月より兵庫県立大学経済学部、経営学部となる)の陳来幸氏および孫中山記念館の蒋海波氏などの協力の下、博物館の再開作業が進められてきた。KCCビルの二階を展示室とし、十階に収蔵室を設けた。また、展示室の補修工事を実施した。工事の経費は、王館長が中心となり、華僑華人の団体・個人などから募った。それと同時併行して、収蔵室で所蔵物の調査・整理作業が実施された¹⁰。目録はまだ作成中だが、現時点では、文物550点、書籍4000冊、陳徳仁氏によって作成されたファイル600冊である。

2003年4月1日、華僑歴史博物館は再開館し、英語名称がKobe Overseas Chinese History Museumと定められた。副館長(第4代)には藍璞氏(元神戸中華同文学学校校長、現館長)が就任した。4月13日には、中華会館で「神戸華僑歴史博物館リニューアルオープン記念講演会」が開かれ¹¹、さらに2003年6月25日、『神戸華僑歴史博物館通信(News from the Kobe Overseas Chinese

History Museum)』が創刊された。

華僑歴史博物館の展示内容と特徴

再開した華僑歴史博物館は、「神戸に移住してきた華僑に関連する歴史を記述的に展示する」という趣旨を明確にし、「神戸華僑歴史博物館」という名称は、「神戸華僑の」「神戸華僑による」「神戸華僑のための」歴史博物館を意味すると再解釈した(蒋2003)。この趣旨に基づき、それまで華僑関連の資料が数多く並べられていた二階の展示室では、200点に絞られた神戸華僑の歴史と文化に関する歴史文物、資料が統一規格化したパネルや写真をもって「展示」されるようになった。では、「記述的に神戸の歴史を語る」際、いかなる歴史的事件や文化的シンボルが選ばれ、そして如何に「神戸華僑の歴史」を表現しようとしたのか。また、自らの文化と歴史の解釈・提示を試みた華僑は何を主張しようとするのか。以下、これらの点について検討していきたい。

1. 「落地生根」というテーマと神戸華僑の歴史・文化

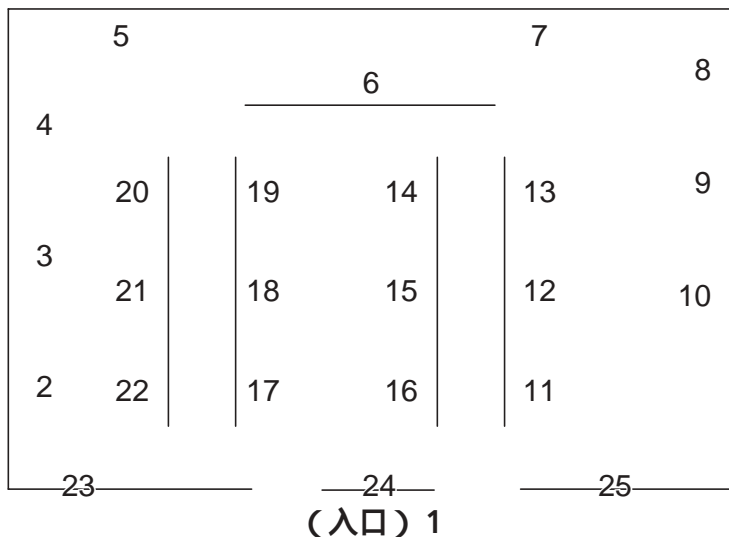
展示室における展示は、大まかに「神戸華僑の歴史」と各種の特定テーマの二種類に分けることができる。

展示室の入り口の一面を除いた三面には、主に神戸華僑の歴史についての資料や写真が展示されている。神戸華僑の歴史は、六つの時期に分けられ、それぞれの時期が「神戸開港と中国人の渡来(1868-1893年)」、「辛亥革命と華僑(1911-1913年)」、「華僑社会の発展(1893-1937年)」、「抗日戦争と華僑(1937-1945年)」、「華僑社会の再興(1945-1970年代)」、「共生共栄時代に生きる(1980

年代-2003年)」とのサブタイトルに特徴づけられ、項目ごとに説明されている。各時期のサブタイトルから展示品、および説明文を全体的に見れば、華僑の「落地生根」(華僑が移住先に根を下ろしたことのたとえ)の特質がここで訴えられているように思われる。つまり、華僑が150年近くの歴史の中で、如何に異国の日本で創業してきたのか、そしてどのように神戸に根をおろし、神戸ないし日本社会の一員として神戸の近代化発展に貢献してきたかという主旨が貫かれている。

この時期区分及び各時期の華僑社会の性質の解釈については、神阪中華会館編『落地生根 - 神戸華僑と神阪中華会館の百年』(2000年出版)に大きな影響を受けたと思われる。当書は、神戸華僑が華僑の歴史を華僑自身の手によって体系的にまとめ出版しようという趣旨に基づき、中国や華僑研究の専門家の協力を得て(中華会館 2000: 459)編纂したものであり、館長の王柏林氏は当時編纂委員会の委員としてその編集に携わっていた。王柏林氏は神戸開港当初から活躍していた福建出身華僑王明玉・王敬祥父子の四代目子孫であり、商業に従事する傍ら神戸中華同文学校の理事や孫中山記念館副館長など、神戸華僑に関する文化事業に強い関心を抱いていた。『落地生根』の編集や長い文化活動の経験から、王氏は、神戸華僑の歴史は「落地生根」の過程であると認識し、博物館のテーマとして「落地生根」と書かれた額(神戸中華同文学校校長金翼書)を展示室の入り口に掲げた。また、各時期の展示に選出された資料は、有名な事件、人物、会社(店舗)、或いは、歴史が長く、神戸ないし日本に貢献度の高い

図1 2003年再開した展示室の平面図



- 1、「落地生根」の額（神戸中華同文学校校長金翼氏題）
- 2、神戸開港と中国人渡来
- 3、辛亥革命と華僑
- 4、華僑社会の発展
- 5、華僑の文化（神戸在留中国書画家の作品）
- 6、呉錦堂生前の様子と故郷
- 7、神戸中華同文学校の百年、同文学校の写真、品物
- 8、抗日戦争と華僑
- 9、華僑社会の再興
- 10、共生共栄の時代に生きる
- 11、世界華商大会（七回）や神戸中華総商会
- 12、華僑と野球やバスケットボール、（神戸中華クラブ）武彘登山会
- 13、神阪中華義荘関連の写真
- 14、南京町区画整備前後様子（地図）
- 15、民生広東料理、老祥記などの老舗の古写真
- 16、阪神大震災直後市民に食べ物を提供する出店の写真
- 17、長崎ランタンフェスティバル獅子舞・龍踊（じゃおどり）や孔子祭などの写真
- 18、横浜関帝廟や獅子舞の写真
- 19、函館中華会館、京都華僑総会、大阪関帝廟の写真
- 20、関帝廟の様子、釈仁光氏の写真、関羽像、普度勝会
- 21、華僑と神戸のマッチ産業、華僑のマッチ商業
- 22、復興号の規約や金門民俗文化村
- 23、「博愛」の額と孫文の写真
- 24、陳徳仁氏写真と題字
- 25、滝川儀作氏写真

事件や人物に絞られている。

真中の展示スペースでは、いくつかの特定テーマに分けて、神戸華僑の経済・信仰・文化活動や、南京町および京都、大阪、横浜と長崎など主な華僑居住地の様子が紹介されている。早期華僑の経済活動の典型として取り上げられている華僑のマッチ産業の中では、当時使用されていたマッチラベルがいくつか展示されている。例えば、当時アヘンが氾濫していた中国国内の状況を反映して、華僑が中国に輸出するマッチの中には、マッチラベルにアヘン中毒を治

療する薬草である臥龍草の紹介と飲み方が書かれていたものがあつた。これらは、経済活動を行うと同時に、祖国のことを心配し、国民性の向上を図ろうとする当時の華僑の愛国心をあらわすものとされている。また、古くから南京町で開店し現在でも人気の高い「老祥記」などの写真や、神戸・大阪華僑が利用してきた中国人墓地神阪中華義荘など、神戸華僑の文化的雰囲気を表すものが取り上げられ、展示されている。ほかに、日本の他地域の華僑、特に長崎と横浜の春節祭や孔子誕などの大きな華僑行

事や、神戸華僑も参加する世界華商大会の1～7回のパンフレットなど、神戸以外の華僑の活動も紹介されている。

2. 展示内容と方法に見られるいくつかの特徴

(1) 華僑歴史博物館の案内役

規格化したパネルや写真を見せるだけでなく、博物館に案内役を設けているところは、神戸華僑歴史博物館の特徴のひとつである。前館長の王柏林氏、副館長の藍璞氏以外、R氏を始めとする数名の華僑がボランティアとして展示を見にくる来館者に華僑の歴史と文化について説明している。

華僑歴史博物館の展示室は狭く、展示できる資料も限られているため、王、藍両氏が相談した上で、来館者により面白く、具体的に展示内容を理解してもらう為に、案内役を設けることにした。

2003年1月に資料整理などの手伝いで華僑歴史博物館に関わるようになったR氏は博物館が再開したその年の4月から館内の案内役も勤めている。R氏は現在、神戸華僑の各時期の歴史や、それぞれの展示品の由来とそれに関するエピソードをわかりやすく、面白く来館者に説明しているが、最初しばらくの間、館長らが説明するのを聞いて覚えたという。彼は台湾出身の父と神戸出身の華僑である母を持つ華僑二世であり、小学校五年生まで神戸中華同文学校で民族教育を受けていたが、それ以後日本の学校に転校し、大学卒業後日本の会社に就職した。こうしたR氏の華僑の歴史に関する知識は必ずしも多かったとはいえない。しかし、「日本社会に飛び込んで、再び華僑社会に戻った」¹²という人生の経験があるだけに、華僑

として日本社会と華僑社会をどのように生き抜くかという切実な問題を「神戸華僑の歴史」と結び付けて説明するのに適した人選だとされている。現在R氏は、地元のラジオ番組などに出演し、或いは番組にファックスを送ったりして、博物館のことを宣伝している。彼は、「歴史は過去のことだけど、未来への発信ともなる」ということをモットーに、華僑歴史博物館で自分自身の経験や現在の世界情勢などと結び付けて、神戸華僑の歴史について説明し、それほど知られていない神戸華僑の歴史をより多くの人に広めようとしている。

(2) 日本社会との関係の描き方

博物館では、華僑が日本人と交流を重ねてきたことや日本社会と深くかかわったことを少なからぬ資料をもって強調している。華僑来日初期のものの中には、商館の前で華僑と日本人がともに映っている写真があり、来日当初から、中国人と日本人がともに働いていたことを示している。また、神戸華僑と深くかかわっていたとされる滝川儀作氏の肖像画が入り口の左側の壁に飾ってある。滝川氏は、明治、大正、昭和の三代にわたって日本の政界・経済界で活躍した名士であり、1924年孫文を招き、県立第一高女（現兵庫県庁）において「大アジア主義」の講演を主催したり、戦後、神戸中華同文学校の校舎用地の問題で神戸市との交渉に当たり、神戸華僑や中日友好のために大きく貢献した人物として神戸華僑から尊敬されている。展示されている肖像画は、滝川氏の88歳の時華僑から贈られた長衫馬掛（中国の大礼服）を着用した様子である。また、現在のものでは、阪神大震災直後南

京町の一部の店舗から無料で提供された暖かいお粥や餃子を、列を並んで食べている人々の写真などがある。この地震の避難、救助活動及び震災後の復興において、華僑は華僑の組織・団体と共に地域や日本の行政に頼ることが出来た一方、華僑が運営する震災対策本部などの組織は、華僑にも日本人にも平等に救援物質を提供した。震災後いち早く復興した南京町が市民に餃子、お粥など食物を無料提供するなど、神戸華僑の救援活動への貢献は高く評価されている。この写真は南京町、神戸華僑が地域社会に果たした役割を象徴的に示し、阪神大震災から華僑が多文化共生について多く教えられた（安井他1996）ことや華僑と日本人が「共生共栄」する可能性を語っているのである。

また、博物館に中国との関係を語る資料が比較的少ないことは注目すべきである。華僑の中で人望のある、あるいは日本でも名が知られている華僑（呉錦堂など）と彼らの故郷や辛亥革命あるいは孫文との関わり以外、殆ど展示されていない。1949年中華人民共和国の成立や1972年日中国交回復など注目されている時期の華僑の動向について殆ど触れていない。これは次項でまた詳述するが、中国と台湾にかかわる政治的な要素をできるだけ避けようとする意図もそこから読み取れる。あるいは、こういった政治的な立場を取り除いて、居住地である日本、神戸との関わりを描いた方が、神戸という地に根ざした彼らのエスニック・アイデンティティをより明確にあらわすことができるかとされているのだろう。

実際、エスニック集団が地域社会への貢献を主流社会に認めてもらおうとするには、

大きな理由がある。それは、その集団の構成員全体が認められることであり、集団の、そして個々人の民族的・文化的帰属意識を支えることにつながるからである。このような事例はほかの移民グループにも見られる。たとえば、太平洋戦争中、進駐した日本軍に徴兵、徴用され、日本軍に協力を強いられたフィリピンの日系人は、戦後「対日協力者」としてフィリピン人の迫害の対象となっていた。そのため、バギオ市に居住する、とくに太平洋戦争を経験した二世の日系人は住民の強い反日感情を恐れて、日本人が祖先であることを隠し続けてきたが、1980年代、1990年代初期のベンゲット道路建設に際して日本人が果たした役割が地元から評価されたのを機に、日本人移民であることを公にする日系人が少しずつ増えていったという（大野1997：169 - 178）。したがって、エスニック集団の、地域社会によって認められている貢献やシンボルは、集団の構成員が民族的誇りと自信をもって自分の文化を提示し、その存在をアピールする根拠となると考えられる。華僑と中国との繋がりが弱くなってきているのは事実でもあるが、それより、歴史上、神戸において日本人と肩を並べて活躍してきたこと、最近でも阪神大震災において地域社会に大きく貢献したことを認めてもらうことが、日本に根ざした彼らの切実な願望なのである。

（3）日中関係などの歴史問題への態度

華僑の日本社会における地位は日中関係の変化に大きく影響されてきたことは言うまでもない。では、日中関係史上最も不幸な時期といわれる日中戦争を神戸華僑は如

何に展示しているのだろう。

周知の通り、戦争賠償や靖国神社への参拝問題など日本政府の戦後処理を巡る中国政府の批判的姿勢に影響されてか、中国国内の反日感情は静まっているとはいえない¹³。日本華僑も、日中戦争中に敵国人と見られ、様々な面で圧制・圧迫されてきた経験があり、日中戦争を決して快く思っていない。「神戸華僑と抗日戦争」というカテゴリーの中で、戦時中日本当局による福建出身の呉服行商人への弾圧の事例が取り上げられ、当時拷問によって獄死した陳守海氏などの資料が展示されている。戦争中、神戸華僑が蒙った大きな弾圧は三回あり、呉服行商人への弾圧、1937年9月15日に国民党関係者13名の華僑が検挙されたこと、同年12月12日に在日国民党党員が一切に検挙され、神戸では20名の華僑が逮捕されたことである（中華会館2000：197 - 201）。ほかにも、華僑経済の縮小や華僑の大量帰国など戦時中華僑が経験した苦難は枚挙にいとまがない。これらの中から、陳守海氏のような無力な行商人が「通敵」という罪状で逮捕・拷問されて獄死したという、最も「平凡的」な行商人の不幸を通して、神戸華僑が圧制・弾圧された歴史を生々しく反映しようとするのである。ただ、歴史的に形成された中国国内の反日感情とは異なり、「抗日戦争」を神戸華僑の長い歴史の一部として展示することによって、華僑自身の、日中戦争、あるいは母国と居住国との国家関係に対する態度と立場を明確に示すことをこの展示コーナーの目的としているように思われる。日中戦争について、案内役を務めているR氏は当時の写真や文字資料を用いて、当時の華僑の境遇を来館者の日本人に説明

し、戦争は日中両国関係の問題であっても、個々人の日本人と中国人の付き合いに影を落とすべきではないと付け加える。日本社会の一員として日本に定住していくのに、両者に関わった歴史を正確に理解してもらうことこそ、真の共生への道であると、彼らは考えているのだろう。

（４）イデオロギー問題への配慮

神戸華僑は自らの歴史を展示する際、華僑社会の文化・思想信条などにおける多様性に対しても配慮している。その一つは1949年中華人民共和国成立後の大陸華僑と台湾出身華僑との相互関係である。

台湾省出身者は、1895年「下関条約」による台湾「割譲」によって中国国籍を失ったが、1946年、半世紀に渡る歳月を経てまた中国国籍を回復した。当時「新華僑」と呼ばれた彼らは、圧倒的な人数で在日華僑人口の中に加わり¹⁴、戦後の華僑社会を構成する最も大きなグループとなった。1952年、横浜の華僑社会は本国の政治情勢の影響を受け、いち早く台湾系と大陸系とに分裂した。同じ時期に、神戸でも同じような状況に陥ったが、神戸華僑は中国政府と台湾政府に等距離をおき、自主性を貫いて、「分裂ではなく、団結の道を歩んできた」（中華会館2000：254）。1972年に、日本は台湾と断交し、中国と国交を結んだ後、台湾系華僑と大陸系華僑の立場が逆転したように思われたが、互いの立場を考慮し、華僑全体の利益を守りながら物事を進める伝統はそのあとに継承されてきた。この中で、神戸中華同文学学校はイデオロギーの対立を超えて、台湾系と大陸系を問わず、すべての中国系の子どもを受け入れ、教員自作の教科書を

もって民族教育を貫いたことで、華僑社会の統合に大きな役割を果たしてきた¹⁵。展示室に、神戸中華同文学学校のコーナーを設けているのは、神戸華僑は中華同文学学校を精神的なよりどころとし、神戸の華僑社会の基盤をなす中心的な機関とみなしていることを示している。1995年阪神大震災の時、神戸華僑震災対策本部が神戸中華同文学学校に設置されたのは、華僑全員が気軽に利用できるという配慮からだという。この「顧全大局」、互いを配慮する伝統に則って、神戸華僑歴史博物館では、政治的な対立を引きおこすような資料が意図的に避けられたと考えられる。これはまた、エスニック・グループとして日本社会で定住していく上に必要とされる華僑社会のまとまりを保つために蓄積されてきた知恵といえよう。

ちなみに、1979年以後来日した「新華僑」について殆ど触れていないこともひとつの特徴である。神戸（兵庫県）においても、新華僑の人数が明らかに老華僑を上回り、中国人社会で大きな比重を示し、力を発揮しているのが現状である。神戸華僑の歴史の最後の段階とされる「共生共栄の時代」では、阪神大震災での老華僑と留学生との関わりも取り上げられ、ここで初めて神戸における新華僑と老華僑のつながりが見られるものの、各資料から新華僑が明らかに展示の対象外とされていることが伺われる。来日後の歴史が浅い新華僑の資料が少なく、流動性も強いいため、新華僑の情報が歴史博物館で把握できない現状もあるが、現時点では新華僑と老華僑は未だに別々のグループとして活動していること、そして両者が互いを受け入れてはいない現実がこの展示コーナーから読み取れる¹⁶。

以上、再開した神戸華僑歴史博物館の展示内容とその特徴を分析し、神戸華僑がエスニック集団として、民族的・文化的帰属性を保持しながら、地域社会に根ざしてきたことと、地域社会の一員として神戸、日本に貢献してきたことを主張していることをうかがうことができた。一方、日本社会における存在感をアピールする際、地域社会と華僑社会内部への配慮をも読み取れた。つまり、ほかの集団と相互に理解・信頼する関係を築く一方、集団内部の多様性を尊重し合い、まとまりを保持するという共生の理念がこの展示に貫かれているといえよう。

文化の意識化と華僑エスニシティ

1. 「落地生根」が意味するもの

以上見てきたように、華僑歴史博物館は「落地生根」というテーマに沿って、展示内容と方法を工夫している。前館長の王柏林氏は「落地生根」について次のように解釈している。

「落地生根とは、一人の人間が遙か故郷を遠く離れて、海を越え、異国の地に渡り、その土地の人たちと睦みあい、その地の習慣にもなじみ、家業をおこし、子や子孫に囲まれて円満な家庭を築き、やがてはその地の土に帰するさまを言います。私たち神戸の華僑は、山と海に囲まれた、この麗しの地、神戸こそが自らの子孫を育むべきところと思ひさだめ、深く根をおろし、地域社会の発展に応分の財を寄せ、まごころと力を注いでまいりました……。」と（『落地生根 - 華僑の生き方』神戸華僑歴史博物館パンフレット）。

この解釈を博物館の展示とあわせて考え

れば、「落地生根」は、華僑が中国人としての民族的・文化的帰属意識を持ちながらも、日本に定着してきたことを意味するとなるが、ここで、神戸華僑の個々人の中国と日本に対する帰属意識を分析し、「落地生根」の意味を深く掘り下げてみたいと思う。

異なる年齢層の華僑の意識を反映するものとして、『神戸中華同文学学校校友会会報』（復刊第1号、1987年）に掲載されている、神戸中華同文学学校の卒業生による「中国・日本・私」をテーマとした文章から、第1回生から第31回生までの13人¹⁷⁾の文章を取り上げ、華僑のアイデンティティを分析したいと思う。

日本に生まれた華僑二世、三世は大抵自分が中国的な部分と日本的な部分を兼ね備えていることを自覚している。たとえば、「(私は)中国から見れば少し変な中国人。日本から見れば少し変な日本人(だ)」（第1回）、「暖かい日差しを差し伸べてくれる祖国に、水と土を与えてくれた神戸に...感謝をして私が自分の国籍を中日人であると自覚していた」（第22回）。しかし、「日本生まれの中国人として、日本は私にとっての故郷」とあるように、彼らは、日本を自分の故郷とみなしている。

ただ、中国的な部分と日本的な部分を如何に自分の中でうまく統一していくのか戸惑い、その方法を模索している華僑が多くいるように思われる。

「明治の甲午戦役(日清戦争)から始まって昭和の九・一八事変、七・七事変(芦溝橋事変)そして南京大虐殺と数え切れない事件が心にしこりを残しているとしても、それを乗り越えて現に住んでいる日本、これからも住みつづけていかなければならない

日本になじみ溶け込んでいくことがこれからの課題だと思う...中国と日本の絆として母国中国に何がしかの貢献ができ、また日本との友好にも何がしかの寄与ができるようにしなければならない...」（第4回）。

「われわれ華僑は日本だけでなく中国においても国、社会、人民レベルでは身内とは思われていない...われわれも日本と中国の言語、文化、歴史などをしっかり理解していない... (この)「非中非日」の現状を改善し、「又中又日」(つまり日本と中国の両方に認められ、また自ら両国を理解する)の方向に向かって努力すればこそ発展できる」（第8回）。

つまり、彼らが実際に日本社会で生きてきた経験から身につけた、華僑として生きる方法とは、中国の文化を維持し、中国を理解すると同時に、日本を理解し、日本社会に貢献することであり、日本と中国との橋渡しとなることである。「日本企業に籍を置いたならば、誠心誠意その企業の発展に寄与し、社会に価値あるサービスをして、困難を克服し、その仕事を成し遂げ」るべきである(第5回)。

更に、華僑の文化的・民族的意識は、日本と中国の両国関係や国際政治に束縛されてきただけに、彼らは、中国と日本という国家的、政治的レベルを越えた次元の生存環境を望んでいる。「地球国バンザイ!」の寄稿者K氏(第10回生)は、1945年日本敗戦の時、7歳の少年だった。日本敗戦を聞いた時、「中国人である私は本来ならば『それ見たことか』と飛び上がって喜ぶところなのに喜ばなかった。日本に生まれ、日本に育った私は、すべての感覚が日本人になりきっていたのだろう」と、彼は自分の日本

的な部分を表明する。台湾に仕事で出かけても、「(台湾の人々は自分のことを)完全に日本人と信じきって話をしてくる」。こうしたK氏は、中国に生まれ育った「中国残留孤児」は「日本人」でありながらも、「中国人そのもの」だと感じ、日本生まれ、日本育ちの華僑との類似点を見出し、さらに「国籍という言葉、国境という線引きはすべて人間が作ったもの」だと主張し、「人間は人間なのだから、私はどこに住んでいても私は人間として生きているのだ」「早く世界中が一つの国になればいいな」と切実な願望を表明した。『『これからの世代』...』としては、華僑としての意識をもつ国際人になるべき(第29回)だと主張する華僑は、ほかにも多くいると思われる。

華僑が抱く、完全な中国人でもなく日本人でもないという曖昧な意識は、もちろん、日本に生まれ育ちながらも、中国の国籍や中国人らしき名前などの客観的なシンボルによって獲得されたものだと考えられる。中国人か日本人かと明確に自分のアイデンティティを表明しなければならない場合、彼らは中国においても日本においても不愉快な経験をすることがある。しかしこの意識は、華僑の、日本を故郷とみなしながらも、中国人(=外国人=よそ者)というルーツに所以する「寄人籬下」(居候になること)というネガティブな考え方、あるいは、その考え方の背景となる、中国人や韓国人などを中心とした外国人がいまだに受け入れられていないという日本社会の現状も反映しているのではないと思われる。そして、こういった状況を積極的に生き抜く戦略として、中国人でもあり、日本人でもあるというポジティブな考え方に転換し、地

域社会の一員として居住国の日本に、そして日中間の掛け橋として日中友好に貢献するということが彼らが見つけ、そしてそれを目標としたのである。

従って華僑歴史博物館のテーマとされる「落地生根」は、華僑が日本社会に定住するようになったことを単純に表すのではなく、まさに上述した華僑の考えを反映しているのである。華僑は、文字や写真などの視覚的資料をもって、自らの歴史・文化を解釈し、積極的に主張をしている。彼らは、自分のユニークな歴史・文化から価値を見出し、それが自分の社会的地位の向上や経済的利益の獲得につながるものとして意識し始めたのである。

2. 華僑による「文化の意識化」と文化の提示

日本華僑が文化を意識するようになったのは、様々な原因があると思われるが、主に以下の3点が挙げられる。アメリカやカナダ、オーストラリアの「多文化主義」理念や研究成果が日本国内で紹介され、日本はアイヌや在日コリアン、中国人を含む多民族、多文化国家であると提唱されるなか、これらのエスニック集団の「異文化」が注目され始めた。日本国内における地域観光に伴って「地域文化」が活性化した。自治体によって、神戸や横浜のような外国人が集中して居住していた旧開港地において、その地域を最も象徴する文化的シンボルが文化資源として発掘・奨励され、エスニック集団の伝統的文化も重要な文化資源として地方政府によって保護・振興されている。1997年10月23日、水陸普度勝会(盂蘭盆、神戸の場合は毎年旧暦の7月14 - 16

日に関帝廟にて行われる。)は神戸市より神戸市地域無形民俗文化財第一号として認定された。兵庫県と神戸市の各種の文化保護政策の下で、華僑の自文化への関心が高まり、自分が置かれている社会的地位に対する意識も高まりつつある。上述した二つの背景と絡むが、故国への強い郷愁を抱いていた一世に続き、母国の文化と居住国の文化を両方背負っている二世は、中国人としての文化的・民族的意識が希薄化した三世のために、華僑社会の伝統・文化を何らかの形で残そうと取り組み始めた。

エリントンとゲワーツ(1996)は、パプア・ニューギニアの調査を通して、「誰もが文化を意識している」ことを強調している。長い間植民地支配を受けてきたパプア・ニューギニアにおける住民が、ようやく自由を手に入れた(1975年独立)今日、これまで以上に文化や文化の違いに敏感であり、文化をアイデンティティの源泉、あるいは政治的な資源として重要視している。この「文化の意識化」こそ、「現代の文化をめぐる状況の最も注目すべき特質」だと江淵は指摘する(江淵2002:223)。各民族が自文化を強く意識するのは、「異文化との邂逅を契機としてであり、また近代の『普遍的』システムとの関係性においてである」(梶原1998:7)。

また、近年日本社会の外国人、外国文化への注目度が高まる中で、華僑は自らの文化施設を通じた提示・主張以外にも、日本政府や自治体による文化施設を利用し、自分の存在をアピールすることができるようになった。たとえば、2004年3月25日～6月15日に国立民族学博物館で行われた「特別展：多みんぞくニホン - 在日外国人のく

らし」¹⁸には、神戸華僑は快く資料を提供しただけでなく、親族をつれてきて案内したりギャラリートークにも勤めていた。資料提供者の林氏はこう語った。「単身で来日し、裸一貫で苦勞して事業を起こした祖先の使ったものが日本で展示されることは、祖先たち、ないし自分たちの存在や民族性がやっと日本社会に注目・評価されるようになったことを示していると思う。すごくうれしい」¹⁹。ほかにも、前代華僑に関する資料や文物を日本政府や自治体の文化施設に寄贈する華僑は近年増えている²⁰。自力の保存が困難になったなどの理由もあるだろうが、やはり、林氏が言ったように、華僑の歴史や文化が正面から認められたことで自信と誇りを持つことが出来るからだと思われる。

要するに、華僑はこれまで抑圧されてきた自分の文化・歴史に経済的・政治的価値を見出し、華僑の歴史や文化にある象徴的な要素を選択・解釈することによって、自らのエスニック・アイデンティティを主張するようになったのである。展示品に付け加えられた解説文のほかに、華僑の歴史を語る「案内人」もいることは、華僑の彼らの民族的・文化的意識の主張をいっそう鮮明なものにしていく。つまり、華僑が中国人として日本に根ざしてきたと自覚したことと、外国人に対して様々な制限や差別が依然として存在している現実とのギャップが縮み、そしてなくなるという未来に向けて、華僑歴史博物館は「共生」の理念や理想像を「多民族社会」を目指している日本社会に提示しているのである。

王柏林氏が地元誌のインタビューを受けたときも、「近頃、神戸の港から何となく活気が消えてしまったように感じます。何と

かもっと活気を取り戻してほしいという気持ちになります...私のように4代も神戸でお世話になっていると、神戸はもう私にとって、単なる居住地ではなく、私の感性の内では故郷以上のものと感じます...(阪神大震災のとき)陳舜臣さんが、神戸新聞に、あの時、泣きながら神戸のことを書かれたのを読んで、私も号泣したくなるほど悲しくて、涙が止まらなくなりました。...(神戸が)一日も早く日本の物流の拠点としての地位を取り戻してほしいというのが、『落地生根』した、神戸を愛する一市民である私の心からの願いです」と語った(近畿地方整備局2003)。王氏と同様、神戸市民の一員として、日本人やほかの「外国人」と協調して神戸の発展のために貢献することを願う華僑は少なくはないと考えられる(毎日新聞2003年5月14日付)。

終わりに

以上、神戸華僑歴史博物館の展示内容と特徴を分析し、神戸華僑の特質と関連づけながら、彼らの主張しようとするエスニック・アイデンティティの一側面を考察してきた。

博物館の展示を通して、神戸華僑が、150年にも及ぶ歴史の中で、日本と中国の間で活躍し、両国の経済、文化交流に貢献しながら、日本に定住してきたことを認識したことと、自分のルーツに誇りを持ちながら神戸あるいは日本を故郷に生きていくという姿勢が読み取れた。また、彼らが日本社会の一員として認められていないという現状に向かって、神戸華僑の文化的・民族的意識と、真の多文化共生社会の実現を訴えていることが伺われた。神戸華僑歴史博物

館における展示は、華僑が自分の文化に目覚め、それを一種の社会・政治的な手段として利用していることを示しているのであり、華僑のアイデンティティ・ポリティクスとして理解できる。この意味では、再開後の華僑歴史博物館は、華僑が自らのエスニック・アイデンティティを積極的に日本社会に提示するための手段であると理解できよう。

一方、神戸華僑歴史博物館における華僑の歴史・文化についての展示はもちろん、中国人意識が希薄化していった三世・四世華僑に対して、中国人としての民族的・文化的出自を誇示し、神戸華僑としての自信を持つようにという陳徳仁氏時代からのメッセージも込められている。神戸中華同文学校や関帝廟と同様、「華僑エスニシティの拠点」として祖先の歴史を展示資料の形で後世に伝え、民族意識を喚起する役割も持ちあわせており、神戸華僑のアイデンティティのシンボルの一つとなっている。

神戸市の観光案内地図や公式ホームページでは、華僑歴史博物館は観光スポットの一つとして紹介されている。「異文化理解」教育の一環として兵庫県内の小中学校の生徒は華僑歴史博物館を見学に訪れることもあるという。現在多文化、多民族社会を目指す日本も、在日外国人および彼らの文化を一種の資源として意識し、エスニック観光など特に経済的領域から利用し始めている。自治体と華僑の、文化を意識的に利用する目的と手段における違いは当面なくならないが、華僑歴史博物館の教育効果を図っての自治体と華僑の協力、共同作業の実現は今後不可能ではないだろう。華僑による自文化の展示・主張に対する日本人の反

応や、日本社会による外国人文化を展示することへの華僑のかかわり方、あるいは両者の共生文化への共同作業は今後の課題として注目していきたい。

注

1. ここでは特別な説明がない限り、「華僑」は1972年以前に來日し定住した中国人とその子孫いわゆる「老華僑」をさすこととする。それに対して、1972年以降來日した中国人を「新華僑」と区別して呼んでおく。
2. 博物館を通してのアイデンティティとしての文化の主張は世界各地で見られる。たとえば、先住民やカナダ南西海岸、バンクーバー周辺海岸部や小島に住んでいる先住民による民族博物館ウーミスタ文化センター（U'mista Cultural Centre）やクワギウルス博物館（Kwagwiltz Museum）、アメリカ南西部サンタフェ市にあるプエブロ・インディアン芸術文化博物館（MIAC）などはその類である（江淵2002b：227 - 234）。
3. 日本人商人と華僑の雑居は、神戸南京町の特色のひとつである。1910年代から30年代にかけて、南京町は日本全国で有名な商店街となったことや、現在中国文化を提示する観光地として多くの日本人観光客を引き寄せていることなど、すべて日本人と華僑の共同作業の結果だと言えよう。また、関帝廟や華僑学校およびほかの華僑組織などは南京町から少し離れていることから、横浜中華街と比べ南京町が神戸華僑のコミュニティの結束力を強化する役割は最初から弱いと考えられている。
4. 1892年に、神戸にあった八間公所、広業公所、三江公所などの同郷団体を統合、華僑の団結をはかり、兵庫県など日本側との折衝にあたる機関として設立された。現在神戸市中央区下山手通二丁目に新ビルをかまえている。
5. 神戸華商の中核機構。第二次世界大戦中、日本の華僑団体統合政策の結果、1918年設立の旧神戸中華総商會が改組の上、1939年1月、神戸広業公所、神戸福建公所、神戸三江公所を吸収合併し、広業公所の所在地（現中央区海岸通り三丁目）に再組織され、中日親善と貿易復興を目標とした。旧神戸中華総商會に代わって、改組された中華総商會は華商の中心組織として復活し日本の法定団体となった。戦後の停滞期を経て、71年会長となった陳徳仁氏の下で活発化する。1979年に同地にKCCビルが落成する。隔年ごとに開催されている世界華商會議に総商會単位で参会している（可児2002：264 - 265）。
6. 明治期から有力華僑は營業上の便宜の為日本国籍を取得し（二重国籍）、中国国籍と使い分けていた（中華會館2000：110）。
7. 2004年3月30日、神戸華僑蔡勝昌氏へのインタビューによる。
8. 陳徳仁氏の時代から10数年博物館に勤めてきた久保氏へのインタビューによる。2003年12月9日。
9. 1966年、呉錦堂の子孫より孫文生誕100周年を記念して寄贈された移情閣を母体に、84年に神戸市に設立された記念館。明治30年代と推定されるが、呉錦堂は舞子海岸に松海荘という別荘（移情閣）を開いた。そこに、孫文が1913年3月、中日興業公司（後の中日實業公司）設立の陰の推進者である呉錦堂を表敬訪問した。後に、移情閣は明石大橋の架橋工事のため解体したが、寄贈を受けた兵庫県は、服部十三知事の孫文亡命支援と孫文の県立神戸高等女学校（現県庁舎所在地）での歴史的な講演「大アジア問題」を顕彰するために、多大な県費をかけて修復、復元工事を行い、2000年度より明石大橋の傍らの埋立地、垂水区東舞子町の県立舞子公園に移設し、再開館した（可児2002：428）。
10. この作業は平成14年度～平成16年度科学研究費補助金「阪神華僑の国際ネットワークに関する研

- 究」(代表:安井三吉元神戸大学教授)にかかわる資料調査・整理の一部にあたる。
11. 主催者は中華会館、神戸中華総商會、福建同郷會、兵庫県台湾同郷會、三江會館、福建會館である。
12. 2003年12月に行われたR氏へのインタビューによる。
13. 2003年9月珠海で起きた日本人集団買春事件や、10月中国西北大学の文化祭で日本人留学生三人と教師によるわいせつ的な寸劇に対する中国人の抗議運動と反日感情の高揚からも、「近くて遠い」日本に対する中国人の感情は今でも日中戦争の陰に影響されていることが伺われる。
14. 1948年7月日本法務庁の統計によると、在日華僑総数34,482人のうち、台湾出身者は14,046人であり、華僑人口総数の40%強を占めていた。
15. 「大陸系」と「台湾系」に分裂した横浜中華学校と同じように、1950年代初期、神戸中華同文学校もイデオロギーの対立に巻き込まれかねない時期があったが、当時の華僑社会のリーダーの決断や華僑全体の団結により、華僑社会の分裂を避けることができた。(李万之校長等の役割が大きかった)たとえば、神戸大空襲で焼失した同文学校を再建する際必要とした莫大な資金は、学校関係者が各地に奔走して集めてきた。台湾の国民党政府からの条件付きの援助申し入れに対して、学校の自主性が損なわれるのではないかと華僑が相談した結果、辞退した。一方、北京政府から、国民党長老、廖仲凱夫人何香凝の名義での寄付金が学校の銀行口座に振り込まれてきたが、当時の複雑な情勢を考慮し、1972年日中国交正常化まで公表せず、その寄付金にも手をつけずそのままの状態に置かれた(中華會館2000:253)。
16. 博物館における展示は、元留学生の華僑歴史研究者、新華僑とも言われる蔣海波氏が担当していた。蔣氏と王館長の意見はある意味では、一部の老華僑と新華僑の考え方をあらわしているのである。
17. 神戸中華同文学校が終戦後の1946年復校し、その年に中学部を卒業したものが一回生であって、概算して、ここで取り上げられる対象者はおよそ1931~1961年に生まれた者になる。
18. 日本初の外国人についての展示と言われる。この展示は、ここ20年間増加し、日本に定住するようになったフィリピン、ブラジル、ベトナム、中国とコリアンの五つのエスニック・グループが取り上げられ、彼らの伝統文化と暮らしぶりを現物や写真を通して日本社会に理解してもらい、各民族の共生を図ろうとした。
19. 2004年3月24日に行われた、資料提供者林聖福氏(華僑二世)へのインタビューによる。
20. たとえば王柏林氏は、祖父の敬祥に関係する資料、通称『王敬祥文書』(『王敬祥文書』は初期の神戸華僑社会での有力者の一人であった王敬祥が、当時孫文との通信書物などを整理したものである)を2000年に兵庫県立歴史博物館に寄贈した。このように孫中山記念館の管理、華僑の行事である春節祭(1997年)や普度勝会(1997年)を地域無形民俗文化財として認定したことなどといった、自治体の、華僑の歴史と伝統文化に対する積極的な政策を信頼し、自力で保存できない文物や資料などを行政に寄贈し、保管してもらおうと考える華僑は増加している。

参考文献

- 陳徳仁. 1990. 「神戸華僑を語る」『社会学雑誌』第7号. 1-28.
- 陳徳仁. 1980. 「神戸華僑歴史博物館は育つか?」『歴史と神戸』第19巻第1号.
- 陳來幸編. 2003. 『華僑華人とグローバリゼーション』平成14年度~平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(1))「阪神華僑の国際ネットワークに

日本華僑による文化提示とエスニック・アイデンティティの主張

- 関する研究」調査研究資料 1.
- 江淵一公. 2002a. 「先住民と芸術文化運動 社会運動の人類学 ()」江淵一公 (他) 編 『文化人類学研究 環太平洋地域文化のダイナミズム』放送大学教育振興会 : 175 - 194.
- 江淵一公. 2002b. 「文化政策と教育の人類学 政治的・経済的資源としての文化」江淵一公 (他) 編 『文化人類学研究 環太平洋地域文化のダイナミズム』放送大学教育振興会 : 223 - 245.
- 江淵一公 (他) 編. 2002. 『文化人類学研究 環太平洋地域文化のダイナミズム』放送大学教育振興会.
- Errinton, F. & D. Gewertz, 1996, "The Individuation of Tradition in a Papua New Guinea Modernity", *American Anthropologist* 98 (1) :114-126.
- 過放. 1999. 『在日華僑のアイデンティティの変容』東信堂.
- 原田昇. 1996. 「横浜中華街における華僑の年中行事の変容とその要因」『秋大地理』43: 1 - 12.
- 蒋海波. 2003. 「神戸華僑歴史博物館の展示更新と可能性」『神戸華僑歴史博物館通信』No.1.
- 梶原景昭. 1998. 「課題としての文化」梶原景昭 (他) 編 『文化という課題』岩波書店.
- 華僑博物院編. 2000. 『陳徳仁先生紀念集』廈門大学出版社.
- 可児弘明 (他) 編. 2002. 『華僑・華人辞典』弘文堂.
- 近畿地方整備局. 2003. 「落地生根華僑は港を起点に歴史を刻んできた」『海と空の情報誌 みなと物語 近畿vol.5』9 - 13.
- 神戸華僑歴史博物館. 2003. 『神戸華僑歴史博物館通信』No.1.
- 神戸市. 1982. 「神戸華僑歴史博物館々長・神戸中華総商會々長 陳徳仁さんに聞く 『華僑歴史博物館の創設と孫文が神戸に残した逸話』」神戸・三宮『センター』第329号.
- 神戸中華同学校校友会. 1987. 『会報』(復刊号).
- 久保純太郎. 2003. 「神戸華僑歴史博物館所蔵物の調査・整理作業 (中間報告) 所蔵物の概略と定期刊行物の目録 (初稿) について」安井三吉編 『科学研究費補助金 (基盤研究 (A) (1)) 「阪神華僑の国際ネットワークに関する研究」調査研究報告書 (2002年度)』 : 33 - 42.
- 大野俊. 1997. 『観光コースでないフィリピン 歴史と現在 日本との関係史』高文研.
- 太田好信. 1998. 『トランスポジションの思想 文化人類学の再想像』世界思想社.
- 戴国輝. 1980. 『華僑 : 「落葉帰根」から「落地生根」への苦悶と矛盾』研文出版.
- 王維. 2001. 『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ : 祭祀と芸能を中心に』風響社.
- 王柏林. 1990. 「金門島山後郷王家三代記」神戸大学社会学研究会編 『社会学研究』第7号 :
- 王柏林. 2000. 「王敬祥関係文書について」『孫文研究』第28号 : 16 - 32.
- 徐大衛・馮雅萍. 2000. 「采得百花成蜜後 為誰辛勞 為誰甜」華僑博物院編 『陳徳仁先生紀念集』廈門大学出版社 :
- 安井三吉. 1985. 「孫文と私・一在神華僑の立場から 陳徳仁氏に聞く」『孫文研究会会報』第3号.
- 安井三吉. 2003. 「創設者陳徳仁先生のお仕事とその継承」神戸華僑歴史博物館 『神戸華僑歴史博物館通信』No.1.
- 張玉玲. 2004. 「横浜華僑の文化復興運動とエスニック・バウンダリーの再定位 横浜開帝廟の再建および開帝誕の創出を通して」日本華僑華人学会 『華僑華人研究』創刊号 : 115 - 139.
- <http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Labo/9639/index.htm> 最終参照03年12月1日
- <http://www9.ocn.ne.jp/~chuzan/> 最終参照日03年12月1日
- <http://www.asianmonth.com/schedule2003/jpn0044.html> 最終参照日 03年12月10日

<http://vr.theatre.ntu.edu.tw/fineart/museum/m129/m129.htm> 最終参照日 04年1月28日

謝辞

本稿で扱った資料に関しては、神戸華僑歴史博物館のホームページ以外、前館長の王柏林氏や、博物館の再開に携わった安井三吉氏、陳来幸氏、蒋海波氏など多くの方々のご教示、ご協力をいただいた。この場を借りて改めて御礼を申し上げたい。